おしりふき

What's in a name?

菊澤 律子（きくさわ りつこ）　民博 先端人類科学研究部

世界にはまだトイレが完備していない地域も多く、ウォッシュレットにすっかり甘やかされているわたしたちが調査に行くときには、周到な準備が必要だ。「原っぱの真んなか・囲いなし」という環境については、慣れれば済むが、さて、用を済ませた後の始末はというと、わたしたちの柔（やわ）なお尻は適応力に乏しい。かくてスーツケースには、滞在期間分の巻物が入ることになる。ウェットティッシュならぬ、ウェットトイレットペーパーも数パック。「リフレッシュレット」というおしゃれな商品名がついているが、日常語としてはちと長すぎ、我が家では「おしりふき」とよぶようになった。用途に基づく命名である。ちなみに日本では、平安時代までは木べらが使われたが、江戸時代になって「落とし紙」が使われるようになったらしい。水で洗うのはもちろん、縄を使うとか、犬になめさせるとか、調べてみると世界各地でさまざまあるようで、経験不足を痛感させられる。

マダガスカルのベチミサラカ地域に調査に行くときにも、「おしりふき」は必須アイテム。首都から地方首都に向けては一三人乗りの長距離バスに乗る。詰め込まれて七時間、途中で必要が生じたときには天井をたたいて合図をする。乗り物が原っぱの真んなかで止まり、乗客は思い思いの方向に散ってゆく。乗り換えてさらに四時間半、終点の街からは徒歩で一時間。途中で必要になったらもちろん、原っぱのなかに入る。ポケットには紙製品。そうこうして到着したのは、田んぼの真んなかにある小さな村だった。この辺りは、クローブやライチが換金作物となっており、収穫期には皆、そのことで頭がいっぱい。滞在時間が限られているわたしは、それでも言語調査をする。みんなが話したいクローブの現地名、部分名称から始めて、クローブ抽出装置の名前、装置に生えているキノコの名前、周りに生えている草の名前、と、少しずつ移動しながら順に聞いてゆくと、植物に詳しい人が集まってくる。にぎやかな村人たちに囲まれて、村から少し離れた原っぱのなかで書きとりをしていたときのこと、突然誰かが叫んだ。「おしりふき!」。「えっ?」とわたし。「これこれ!」。手には、濃い緑色で比較的面積のある丸い形の葉。「やわらかくてちょうどいいでしょ?」。きょとんとするわたしに一同、大笑い。そうなんだ。「おしりふき」という名前の草なんだ。本当に使うんだ。言われてみれば、狩猟採集民が植物の葉を使うというのは聞いたことがあった。どうして思いつかなかったんだろう?

帰国後、そんな名前の草なんて日本にはきっとないよね、と思いながら検索してみたところ……「ママコノシリヌグイ（継子（ままこ）の尻拭い）」がヒットした。韓国では、「嫁の尻拭き草」とよばれるとか。別名トゲソバ（棘蕎麦）とよばれるこの植物は、茎や葉がトゲに覆われている。「憎い」継子や嫁の尻をこの草で拭くということらしい。うーん、こちらは、本当の用途に基づく命名でないことを祈る。